

## 2025年9月の総評に代えて

○林 桂 ○

### ●汐見りら●(東京都 24歳)

まごころを  
見せたいけれどがま口を  
開けたらレシートが溢れちゃう

【評】相手に甘えることなく、割り勘会計をしたい。しかし、そのためにがま口を開けると、がま口を膨らませているレシートに気づかれてしまいそうだ。余りにも生活臭がすると、相手も興ざめしてしまうのではないか。ここは言葉に甘えた方がよさそうだ。ちょっとユーモラス。この作者には珍しい。

### ●林 みき●(東京都 48歳)

鳥渡り書き手不在のインク瓶

【評】つけペンのインク瓶を使って書くような人は今時珍しい。その人がいなくなつて、インク瓶は、誰も使うことなく、しかし、処分もされずに机の上に置かれたままである。直ぐに処分されずに、忘れたように残るところに、インク瓶の不思議な存在感がある。「鳥渡り」

には、不在の人との時空の隔たりが仮託されているようだ。

●常田 瑛子 ●(山口県 38歳)

十月の森に入ればわたしだけ  
映っていない静かな鏡

【評】秋めいた「十月の森」の不思議な静謐さを感じさせる。「映っていない静かな鏡」には、異空間に迷い込んだ感がある。

●飛和 ●(長野県 38歳)

木琴の少女のままでいたかった

【評】「木琴の少女」をどう読むか。確証はない。しかし、不思議で謎めいて、心に残る。「いたかった」は、純朴な世慣れない存在を呼び寄せているようだ。

●金光 舞 ●(埼玉県 19歳)

海の匂いにかまきりが  
ひ  
る  
がえる

【評】「ひるがえる」が、かまきりが身を翻すさまのカリグラム表現になっている。かまきりにとって、身を翻すほどの「海の匂い」とは何だったのだろう。

●牛田 悠貴 ●(東京都 27歳)

びみょうに泣きたい時間で  
できている  
泥団子が十五個ならぶ

【評】保育園か幼稚園での泥団子遊びだろう。十五個は、一人で作ったのではなく、十五人の遊びの中でできたものだろう。「びみょうに泣きたい時間」が、一心に静かに泥団子に向かう子どもたちの心理描写となっている。確かにこんな心理での作業かもしれない。

●大西 美優 ●(広島県 24歳)

蓑にくるまれて金箔色のゆめ

【評】「蓑にくるまれて」いるのは、やはり蓑虫だろう。傍目には粗末な衣装に見えようとも、住人の蓑虫には最上の「金箔色のゆめ」を見る場なのだと喝破する。

●あゆな●(群馬県 40歳)

お子さまが  
シールがあれば買えるよと  
おっしゃっている開店直後

【評】ママゴトの場面。シールがお金代わり。  
子どもにとってのシールの価値が窺える。「シ  
ールがあれば買えるよ」は子ども店主の言  
葉。客（おそらく大人）に向かう言葉ながら、  
丁寧語も尊敬語もない。一方、「お子さま」  
「おっしゃっている」と、客分の「作者」は、敬  
語対応である。

●つきミカン●(東京都 63歳)

上田馬之助という声  
を聞いて  
さっとそっちを見た  
午後の喫茶店

【評】喫茶店の隣席の会話から漏ってきた  
「上田馬之助」の名前。このマイナーなプロレ  
スラーの名前を語ることも、反応することもで  
きるのは、ごく限られた世代だろう。「作者」  
が確認しようとしたのは、そんな同時代を生  
きた人の姿である。

●雨宮 慈 ●( 静岡県 32歳 )

桃太郎って  
お爺さんは山に行かなくても  
始まるくない?  
と言う君との登下校

【評】確かに物語の展開からは、桃太郎の桃を拾い上げたお婆さんは、欠くべからざる存在だが、山に柴かりに行ったお爺さんは、その時に何をしていても物語が成立してしまうというゆるい存在である。夫婦の分業の姿として理解するのが一般であれば、物語の展開の必然の問題として読む「君」は、卓越した理解者と言えるだろう。「始まるくない?」の語法も、若い世代の独特のものとして書き留めている。ただ。「登下校」では、登校時も下校時も同じ話題を繰り返し語ったことになり、やや違和感が残る。せわしない登校時ではなく、下校時に絞った方がここでは効果的とは思うが。

●翅綿 ●( 秋田県 20歳 )

喪服を着ている家族が  
少し笑い合って歩いてる

【評】葬儀を終えて帰路につこうとしている

のだろう。「少し笑い合って歩いてる」は、緊張からの解放の中にいる家族の姿である。この場面の視点のよさ。「少し」には寂しげな笑いを思い浮かべる。

### ●山野ゆかり●(東京都 35歳)

雨の名の  
どれかひとつを降りながら  
ただ忘れられてしまひたかった

【評】「どれかひとつを降りながら」の修辞が巧み。日本の文化は、雨に多くの名前を持つ。どの季節、どのような降り方をしても、名付けられた雨になっているだろう。一方、「ただ忘れられてしまひたかった」は、「作者」にとって、どのような雨であれ、共通して根底にある思いなのだ。

### ●福地 餅子●(東京都 37歳)

右耳に苺が入っているんです  
三歳の医師 じょうろを手に取り

【評】子どものお医者さんごっこ。病状が右耳に苺が入っているためという診断に驚く。どこからこの発想がきたか。如雨露は治療器具に見立てられている。これもどこからきたの

か。子どもの発想の豊かさ、突拍子もなさ。  
その面白さ。

●小西電波●(北海道 18歳)

カモノハシのくちばし、  
やっぱり湿気ってる？

【評】名前に嘴がつくように、その大きなくちばしは目を引く。ただ、水棲の卵生のほ乳類のくちばしは、鳥類のように乾いているように見えない。「やっぱり湿気ってる？」の疑問は、ある意味でカモノハシの姿を言い止めているようだ。

●葉月ままこ●(福岡県 53歳)

胸に抱く  
吾子があの時  
つぶやいた  
「いいのにおい」の  
「の」をしまう箱

【評】人が母語を獲得する過程はどのようなものだろう。「の」の使い方の誤りの中に、その健気な過程を感じ取っているのだろう。あるいは「いいのにおい」は、母そのものに向かれた印象的な言葉であったかもしれない。

「『の』をしまう箱」のひとつは、母の胸中かも  
しれない。

●鈴蘭 ●(新潟県 18歳)

気がつけば 季節は秋に  
私の夏は  
赤本のなかで 静かにおわった

【評】志望校の過去問題集の赤本。受験勉強で終わった夏。すでに受験手前の季節の秋にいる。